師走 愛南文芸

みなみうわ俳句会

彼岸花畦に点から線となり　中川千代子
夜長かなひばりの唄に酔い痴れて　若林八重子
秋耕や植え物いまだ定まらず　宮下　峰月
柿熟しすずめの会話飽きもせず　竹村　勝利
台風過ぐ安否問うたり問われたり　木村　智子
後の月誰も彼もが若かりし　田口ひさ子
石段の地べたで酌みし秋祭　濵　初榮
鈴虫の独唱にはじまる朝厨　小島　泰子

御荘俳句会

歩きつつ秋草の名を声にして　加洲勢津子
時雨忌や大玻璃の陽の頁くる
露天湯に身体あづけて後の月　尾崎　松恵
初生りの酸橘手くぼに納めけり
夜ばなしの手燭にかかる後の月　山本　金子
秋雨や言葉かけたき傘の人

檳榔子

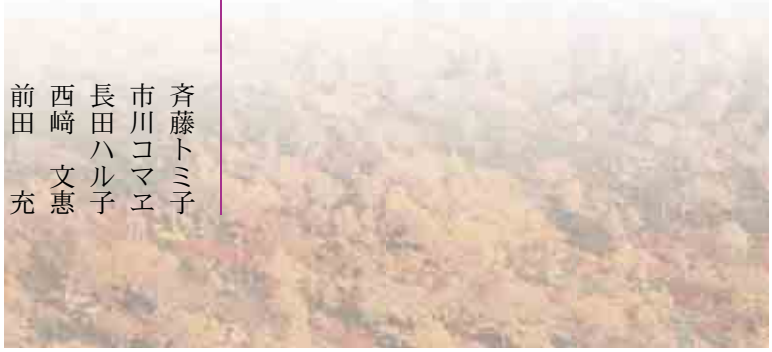
目の前で雲生まれけり秋遍路　若山　節子
秋風の回す風車に昼の月　山口　和子
団栗や遠き日の独楽回り出す　小島　泰子
遠くまで歩いて行きたい金木犀　吉田　朝子
萩の花触れれば零る手のひらに　山口　菫
佛みな何か手に持つ豊の秋　濵野　康子
初炬燵ひいきチームの敗け戦　若林八重子
寝そべれば空にさざ波秋の風　三好ミキヱ
金木犀墨痕淋漓の書道展　吉田モミヱ

西海俳句会

祭終え元の二人の生活かな　利根早智江
水澄めり採血うまき人と出会う　吉田　朝子
涛風や雲間をはしる冬の月　吉田　笑代
母の作る墓の湯飲みや石蕗の花　吉田　弘定

新くさの葉短歌会（はこべ）

さきがけて紅葉に色づく山櫨に雫こぼして雨ふり止まず　斉藤トミ子
知恩院に息子の出張で二、三日会はねば子供の如く待ちをり　市川コマヱ
話し声の聞きたい日には窓開けて学校帰りの子供達まつ　長田ハル子
秋来ぬや露を含みて桜葉のはらり舞い落つ今朝のすずしさ　西﨑　文惠
夏期休暇に入りてわが家を訪ね来し少女の耳にピアスがゆれる　前田　充



はじめまして。赤ちゃん。

10月受付分（敬称略）

地区名	子の名	保護者

ご冥福をお祈りします。

10月受付分（敬称略）

地区名	亡くなった方	享年

※上記情報は、広報誌掲載に対して、
ご家族等に同意をいただいております。